

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

日本の電池は崖っぷちだが、25年以降を見据えよ

吉野 彰 (旭化成名誉フェロー、19年ノーベル化学賞受賞)

1. EV (電気自動車) 化の大きな流れは間違いなく来ている。これまでEV大国は中国だったが、今はEU (欧州連合) が追い抜き、世界をリードしている。米国もバイデン政権に替わり、EV化に突き進んでいる。一方、日本の自動車業界はEV化慎重で、完全にガラパゴス状態だ。かつてはエコカーというとプリウスに象徴される日本のHV (ハイブリッド車) だったが、役目は十分に果たした。ここにしがみついても仕方がない。このままでは、日本の車は海外に輸出できなくなってしまう。
2. 国内の車載電池市場が小さいものだから、日本の電池メーカーは崖っぷちだ。海外の自動車メーカーに頼ることであろうじて健闘している。本当の勝負どころは2025年からだ。欧州の自動車メーカーが中韓の電池メーカーから電池を調達しているのは、25年までを見据えた動き。日本の電池は崖っぷちだが、中韓勢が今、何千億円もの投資をしたからといって焦る必要はない。25年以降にどう動いていけるかが1番のポイントだ。
3. 25年以降、走り回っている車は今売られているEVではないだろう。自動運転やシェアリングなど新しい技術と融合したEVに変わっていく。ここでどんな特性を持つ電池が必要とされるか、という目で先を見るべきだ。

(参考:「週刊東洋経済」2021年11月27日号)

幹部への活きた言葉

商人と実業家の違い

宮本 又郎 (大阪大学名誉教授)

1. 日本は失われた30年といわれますが、特に目立つのがスタートアップの不振です。日本の起業率は極めて低いし、スタートアップする人を尊敬する割合も起業した人の満足度も低い。日本経済の停滞はここに起因すると私は見ています。今こそ起業家をサポートする文化やリスペクトする社会的風潮を取り戻すべきではないでしょうか。
2. 渋沢栄一の果たした役割として、江戸時代までの「商人」と違う「実業家」という概念を示したことも大きかったと思います。商人について渋沢は、幕府や大名ら相手に自分の利益を追求しただけだ、としています。これに対して、明治に入って生まれた実業家については、自らの利益を肯定すると同時に国家社会＝公益を追求すべきだと、と説きました。

(参考:「日経ビジネス」:2021年12月13日号)

ワンポイント経営アドバイス

安住の地を捨てられるか

校條 浩 (東大卒、1991年にシリコンバレーに渡る)

1. 日本企業がこれ以上、イノベーションで後れを取らず、衰退の道から抜けるためには、シリコンバレーの流儀の根底に流れるスピリットを学ぶことが重要だ。個別の技術やシリコンバレーのエコシステムの理解などはその後でいい。シリコンバレーに息づくこのスピリットの根っこを探ると、約150年前のフロンティアスピリット (開拓精神) にたどり着く。
2. 今日本企業に求められているのは新しい経営理論や小手先の方法論ではなく、経営幹部や社員のフロンティア精神だ。社員は、自分の勤める企業の経営者にフロンティア精神がないなら、「安住の地」である今の組織から、荒野に広がるフロンティアに向かう勇気を持てるかどうか問われる。目指すフロンティアは事業部、会社、市場、産業、国などいろいろな次元で考えられる。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2021年12月25日

・2022年1月1日号)

古典に学ぶ

外国品偏重の悪風

(解説) 度々識者が力説する通り、我が国民の思想には忌むべき弊習がある。それは、すなわち外国品偏重の悪風である。外国品だからとて別段排斥する必要がないようにこれを偏重するのあまり内地品を卑下する理由もないはずである。しかるに舶来品といえは総て優秀なものばかりとの観念が、深く国民の上下に普及しているのは誠に慨嘆に堪えない。

(参考: 渋沢栄一「論語と算盤」: 国書刊行会)